新たな「分厚い中産階級」の創造

かつてはホワイトカラーが日本の中間層を担ってきたが、ホワイトカラーは人手が余る段階に入り、それが回復する見込みがほとんどない。労働統計をみると、ホワイトカラーは労働者の３割から４割しかいない。

２１世紀の中産階級はローカル産業、とくにそこで働くエッセンシャルワーカーに担ってもらわなくてはならない。分厚い中産階級は社会を安定させ、経済を成長させていくうえで欠かせない存在である。少数の富裕層がいくらお金を使っても、分厚い中間層の消費力にはかなわない。

しかし、これまでのエッセンシャルワーカーは、むしろ低労働生産性（低賃金だが頭数での雇用創出力が高い）を梯子に雇用の受け皿になることで、ある種の社会的均衡がつくられてしまい、多くの中産階級雇用を生み出すことができなかった。この均衡からの脱却することが社会経済的に急務である。

多様な人生を吸収し、多様な人生を肯定して中産階級に押し上げるほうが、知識集約産業のアッパーホワイトの数を大量に増やすより、はるかに現実的である。こうした選択肢を企業や社会が用意できるかが、これからの日本社会では問われることになる。

これまでは雇用を守ることが労働組合の使命だった。しかし、労働供給制約時代に入り、労働組合がそれほど頑張らなくても雇用は守られる。賃金を上げる、ブラックな会社から労働者が転職することを支援する、という攻めの労務に転換しなければならない。

しかし、エッセンシャルワーカーを高度に格上げし、新しい中産階級にしていくには、教育体系にはじまり、社会に出てからの能力開発に至るまで、教育、社会、経営、労働など、幅広い領域であり方を変えていくことが求められる。

高騰教育においては、グローバルリーダーを養成する大学を除いて、専門技能を養成する教育を行い地域社会に貢献できる形に転換してはどうか。漫然とホワイトカラー予備軍を生産する昭和型モデルとは決別すべきではないか。